
魔法少女リリカルなのはF F ~ Twilight Twins ~

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはFF TwilighT Twins

【Nコード】

N9446F

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

【永遠の箱船】を巡る事件が終結し、時空管理局には再び平穏が戻った。特務機動中隊の隊員エリオン・リーファは終わってしまった事件と、失ったものを思い感傷にふける。しかし、そんな彼らには平穏は用意されていなかった。エリオン・リーファとアリシア・リーファに襲いかかる運命は静かに、確実に二人の日常を侵食していく。去っていった者達、残された者達。彼らは心に決める、「もう二度と手放さない」と……。MidnightCircusの続編。

プロローグ（前書き）

注意と警告

この作品は、アニメ『魔法少女リリカルなのはStrikers』をモチーフとした二次創作です。

本編に関するネタバレを含む可能性がありますのでご注意ください。また、この作品には本編にない独自の設定や、本編の設定を一部無視した表現の使用、また本編では登場しない独自のキャラクターの登場などがなされることがあります。

原作の世界観を重視される方はご注意ください。

この作品は、同ファンフィクション、「Midnight Circus」の続編に当たります。前作をお読みいただかないと理解できない表現を多分に含みますのでご注意ください。

プロローグ

「最後に何か聞いておきたいことはあるか？ 本来は機密事項だが答えられる範囲でいいなら答えよう」

ベルディナ・アーク・ブルーネスはそういつて目を上げた。

その目には何の薄汚れた感情も浮かんで見えない。つまり、今回の事件、エルンストが犠牲になりエルンストが死んだ事件は、彼にとって何のことではない出来事の過ぎなかつたのか。

エリオンはそう思い、ただ黙ってギュツと拳を握りしめた。

ベルディナはそんな彼をただじっと見つめるだけだった。ベルディナは答えを欲する、だから今もエリオンの口から出される答えを待つ。

「……ありません……」

エリオンの口から絞り出される声に、ベルディナは「そうか」とだけ呟き彼の退室を許可した。

時空管理局古代遺物管理部武装特殊部隊、特務機動中隊に帰投したエリオンはそのまま訓練をすることもなく、自室にこもることもなくただ外に出て夕日を眺めていた。

ミッドチルダの夕日は、どこかぼんやりとしていて寂しいとエリオンは感じた。いや、エリオン自身ミッドチルダから殆ど外に出たことのない人間であるため、他と比べることもできないのだが、薄闇へと移ろいでいく町並みはまるで世界が自分が必要とせずただ流れていくように思えてしまう。

何もかもが自分の手をすり抜けて行ってしまった。

「エリオンか、戻っていたのだな」

ランニングを終え、肩にタオルを乗せたシグナムがうずくまる彼

の隣に立っていた。

「シグナム隊長。ええ、報告を忘れていました」

エリオンは面を上げ、夕日を背負って立つ彼女を見上げた。その逆光の中に映るシグナムの輪郭はぼやけ、その表情を伺うことはできないが、エリオンには彼女がどこかもの悲しい雰囲気でした。

夕日はだめだ、あれを見るとどうしても感傷しか浮かんでこない。エリオンはそう思い、太陽から目を背ける。

シグナムも、そんな彼の隣に立ち、壁に背を預けた。

「結局、私たちだけになってしまったか」

その言葉は、次第にさめていく夕暮れの空へと舞い上がり消えていった。

第一話 八神はやての疑惑

【永遠の箱船】一握りの犠牲と多くの悲しみによって落とされた要塞は、その後なんの活動も見せることなく沈黙し、現在は時空管理局の手を離れ地元の公安、軍隊に管轄が委譲されている。

あの要塞で何が起こったのか、何が原因となりそれが引き起こされたのか。あらゆる情報端末を探り出しても、すべての公式記録を読みあさってもそこから得られる回答は『不明』の一言のみ。

ただし、現在その原因において最重要人物として第一級広域指名手配を受けている二人の人物がいる。その名は、レイリア・フォートとエルンスト・カーネル。

彼らの最終所属が特務機動中隊と去れ、それ以前の記録の一切は抹消されている。

現在も捜査が続けられているが、有力な手がかりはなく、その行方を知るものは何処にもいない。この時空世界においては何処にも存在していない。

特務機動中隊の隊長室の執務机に座る八神はやては、端末から得られたその調査報告書の最後の一文に目を通し、軽く、どころではないため息をついた。

「どうしましたですか？ マイスター？」

その傍らを飛ぶ手乗りサイズの少女、彼女のユニゾンデバイスであるリインフォースIIがその様子に気がつき彼女の肩に降り立った。

「これ、見てみ」

はやてが不機嫌そうに指を向けるモニターにリインフォースもそれに目を向けた。

「先の事件ですねえ。私たちがいない間にとんでもないことが起こったです」

ブンブンですと頬をふくらますリインフォースをなでつけながら、はやてはそれでも納得のいかない表情でモニターをにらみつけていた。

あの事件、【永遠の箱船】の事件の詳細をはやては知らない。故に納得できないことが多くあった。

「まず一つ、特務機動中隊から犯罪者が出たって言うのに、何でおとがめなしなんや？ ほんまやったら、中隊解体とか隊員の身柄拘束とかあってもええんやないか？」

指名手配班であるレイリアとエルンストは機動中隊の出身だ。つまり、中隊は犯罪者を排出した部隊であるとして、監査部からの査察を受ける、もしくは公安局の監視が入る、最悪の場合部隊解体となってもいいほどのことのはずだ。しかし、はやてが受けた辞令は、『特務機動中隊の臨時部隊長を務めること』、そして『早急に人員を補充し戦力の確保を行え』の二つだけだった。

つまり、何のお咎めもなし。それどころか、その言い様には『これから十分に働け』と檄を飛ばされたような感覚さえある。

「そして、二つ目」

はやては二本目の指を立てる。

「レイリア君のこと、エルンスト・カーネルのこと。何で記録抹消なんか、なんで、みんな何も言ってくれへんのか？ この二つやね」
はやては事情を知らない。そして、事情を知っていると思われる彼女の友人達もそろって口を紡ぐ。特に、はやてにとっては家族であり自分の守護騎士であるヴィータさえもがその話には押し黙ってしまうことに不満を持っていた。

自分だけ蚊帳の外にされたような、あの事件を境にして皆が自分を置いてどこか遠いところに行ってしまったような。そんな一抹の寂しさがこみ上げる。

「せやからな、リイン。うちは、この事件をもっと詳しく調べたいんや。やから、協力してくれへんかな？」

はやてのその言葉は、リインフォースにとってもっとも身が引き

締まる言葉だった。自らの主に頼りにされている。それを実感することは従者としての誉れだった。

リインフォースは、くるりと回ってはやてに向き直ると、勇ましい表情で敬礼を返した。

「お任せです、マイスターはやて。それで、リインは何をすればいいのですか？」

はやてはそんなリインフォースの可愛らしい仕草と表情に相好を崩し、

「そつやな、ひとまずは、本局にお使いに行うってもらおかな？」

リインフォースが張り切って部屋を飛び去っていき、それと入れ替わりに顔を見せたのは、未だ表情の優れないエリオンだった。

「エリオン・リーファ二等空曹帰還いたしました」

エリオンはそういつて部隊長代理であるはやてに敬礼を送った。

「お帰り、エリオン。いきなり教導隊に呼ばれてデバイスの更新やつて？ ご苦労さんやつたな」

はやては、「敬礼はええよ」と言いながら彼をねぎらった。

「いえ、僕は待っているだけだったので、むしろ退屈でした」

エリオンは嘘はついていない。教導隊に呼ばれたのは、その総長であるベルディナ・アーク・ブルーネスと面会することが主目的だったが、実際、教導隊とAWD社が共同で完成させた新規プランアイマード・ウェボン・デバイスのデバイスへの更新も同時に行われていたのだから。

「新しいデバイスはどんな感じや？」

「まだそれほど使っていないのでどうにも評価できませんが、感じ的には依然と変わらない感じですね」

エリオンはそういいながら左腕に通された腕輪を見下ろした。彼のデバイスの待機モード。双銃型デバイス【トムキャット】から名前を変えた【ラプター】はデバイスの更新を受けたと行ってもその

様相には変化がなかった。

それもそのはず、更新といってもそれは単にデバイスのコアシステムを最新のものにアップデートするだけのことだった。彼の扱うデバイス、キハイル式デバイスシステムはAWD社に勤める天才技士、キハイル・メースが開発した従来型のデバイスシステムとは一線を違えるシステムだ。

高度に並列接続された中央演算装置は、従来なリンカーコアに依存していた魔力制御の大部分を担うようになった。そのため、大規模かつ複雑な呪文式を展開したところで術者にかかる負担は、従来より大幅に軽減されることとなった。

使用者に負担を強いらなくかつ、魔力運用の才覚のないものでもそれと同等の機能を得ることができる。それが戦力の高レベルにおいての平均化と信頼性を与えるものとなった。

そして、今回エリオンが受けた更新はそのシステムのベースラインを一段階上のベースラインに交換することだった。

確かに、反応速度、演算処理速度が僅かながら向上し、自分自身にかかる負担もずいぶん軽減されているとエリオンは感じていたが、それでもその機能が劇的に変化するものではなかった。

それにしても、と自分のデバイスをなでつけるエリオンを見て、はやては少し思った。最近はデバイスの更新が早い、そもそもレギュラー的なデバイスを使用している自分や、新しいものには興味が無い自分の守護騎士は外すとして、その更新速度は以前なら数年に一回というペースだったものが今となつては年一回の更新が当たり前になりつつある。

たしかに、そうして戦力が増強されることは、ただでさえ人材の不足している時空管理局であつてはありがたいことこの上ないだろう。しかし、そういった急激な変化は必ずどこかでツケを払わされるものだとはやては知っていた。

これが何かの前触れにならなければいい。彼女はそう思って、エリオンと二言三言話をして彼の退室を許可した。

「それにしても……」

「といつてはやては表情をかげらせ、立ち上がり背後の窓のブラインドを少しだけつまんで外を見下ろした。

そこに映るものは、最新設備に覆われた訓練施設。本来なら若手の魔導師が熟練の魔導師の指導を受け、連日活発な声が響くはずの所だった。

「うちと、リインと、アグリゲット副隊長と、シグナム。それに、エリオン君だけか。みんな、居のうなつてしまつたんやなあ」

訓練所に木枯らしのようなさめた風が吹き抜けていった。

第二話 見失われた世界

病院の朝は早い。既に常連になりつつあるエリオンはその白い廊下を歩きながら、道行く看護師と朝の挨拶を交わしながら病室に向かっていた。

エリオンは、あの事件の後、一等空士から二等空曹という昇進を果たした。それは一等空士から空士長、空曹補を通り越しての昇進であるため三階級ほど特進したと言ふこととなる。

しかし、それは、エリオンにとって上層部からの体のいい口止めだと自覚していた。

よくあることだ、あの事件の後それに関わり生き延びたものごとごとく昇進をしているという話など。

しかし、二曹となった彼に待っていた職務は、人のいなくなった特務機動中隊の武装A分隊の副分隊長の職務だった。

副分隊長など荷が重い、そう考えたエリオンは辞退も考えたが、武装分隊の人員が不足して居るところか枯渇している現状を見て、それもできないことを悟った。

故に、彼にはやる人が多い。しかし、それでも彼は早朝の時間を見つけてはここに足を運んでいる。

そこには、彼にとってかけがえのない彼女が、彼の血を分けた双子の姉が居るからだ。

アリシア・リーファ。そう書かれた部屋のプレートを確認し、エリオンは数回のノックの後に部屋に足を入れた。

返事はしなかった。それは分かっていることだったが、エリオンはそれがとても心に重くのしかかる。

「アリス？ 起きてる？ 今日も来たよ」

白と青を基調にした部屋はとても涼しげで快適な様子だった。そして、その中央に位置する真っ白なシーツをまとったベッドの上で体を起こす彼女は、その何者も目に映していなかった。

「今日はちょっと寒いね、とても晴れてるんだけど。お昼には暖かくなると思うよ」

そういつてエリオンは閉じられたカーテンを開き、その下に見える中庭の緑あふれる光景を彼女に見せた。

「……うん……」

アリシアは、まるで口から空気を出すようにそう答え、その窓の向こう、一面に晴れ渡る青空に目を向けた。

エルンストが死んだ、そして、アリシアは世界を見失った。

しかし、エリオンにはそれを悲しいとは感じられなかった。どうしてなのだろう、とエリオンは澄み切った蒼穹を仰ぎ見て身のうちに沈む自身の感情を探ろうとした。

そして、それは見つからなかった。

エリオンはアリシしあに目を向けた。彼女はエリオンと目を合わせようとしない。

「アリスはそれだけエルンストが好きだったんだね」

エリオンの口からポツンと漏れだした言葉、”エルンスト”。それはアリシアの耳に届き、次第に彼女の表情を変化させる。

「……エルンスト……エルン、スト……」

アリシアのその瞳に涙が広がっていく、そしてエリオンは自分が過ちを犯してしまったことに気がついた。

「アリス……」

「あ、ああああああ……」

エリオンが彼女に駆け寄ろうとしたその行動を、アリシアの悲痛な叫びがとどめさせてしまう。

「アリス」

「うわあああああ」

その声に気がついた看護師が病室に駆け込み、すぐさま担当医が呼ばれた。

アリシアは押さえつけようとするその医師を、腕をふるって抵抗したが、医師が投与した鎮静剤でやがて眠りに落ちていった。

エリオンはその光景をただ黙って見ているしかなかった。

嵐が去り、再び病室に静寂が戻った。エリオンは時計を見、出勤の時間が近いことを知ると、そのまま立ち上がり、

「それじゃ、アリス。また来るね」

といって病室を後にした。

どうしてこんなことになってしまったのか。病院前からタクシーを拾い、局武装隊施設郡門前で降りたエリオンはそうため息をついた。

基本的に武装隊の施設には民間人の立ち入りはおろか、近づくことさえ許されていない。それは、そこが危険であることと同時に機密保持のためであることは言うまでもないことだろう。

故に、エリオンは民間タクシーから降りた後も、特務機動中隊の施設まで何らかの方法で向かわなければならぬ。

普通なら、各施設への巡回バスに乗るところだが、エリオンはこの日ばかりは無性に歩きたい衝動に駆られていた。

「ねえ、あなた」

空を眺めたり、地面を見下ろしたり。エリオンの視線は不安定に揺らぎ、ついには彼を呼ぶ声にも気がつけなかった。

「あなたよ、あなた。聞こえて居るんでしょう？」

そして、傍らで彼を呼ぶ声は、憤慨したように彼の肩をつかんだ。「うわ！」

エリオンにしてみれば突然のことで、彼は思わず転倒しそうになり足を踏ん張った。

その拍子に先ほどから彼を呼んでいた人物の足を思いつきり踏みつけることになってしまう。

「あいた！ もう、なにするのよ！」

思わず飛び上がり、エリオンを強く押した彼女の力は思いの外強

く、エリオンは苦勞の甲斐なく尻餅をついて転んでしまった。

「なんだ？」

状況のつかめないエリオンの鼻先に突き出されたもの。それは、エリオンにとつて馴染みの深い、魔導師の杖デバイスだった。

「何だとはご挨拶ね。人が話しかけてるのに無視してさ、拳げ句の果てには思いつきり足を踏んでくれちゃって。この落とし前はどうつけてくれるのかしら？」

青い空の下、僅かに吹き抜ける風に靡く長い朱髪が彼の視界を覆う。くつきりとした青いまなざしは、キツと彼を見つめ、ギョツと閉じられた唇には薄ピンクの紅が引かれていた。

そして、時空管理局武装隊の制服をすつきりと着込み、勝ち気な様子で腰に置かれた腕は凜々しさを醸し出していた。

「えっと、君は？」

ここからは階級章が伺えない、しかし、彼女は自分と同年代だと判断したエリオンはそう聞いた。

「私は、クロエ・ルディア。武装隊の職員よ。ところでさ、特務機動中隊の施設って何処にあるか知ってる？」

杖を突き出した体勢のまま、その少女はエリオンの目的地の場所を聞いた。

第三話 黒き祝福を

時空管理局本局は、時空間の海に漂う巨大な船だ。いや、もしもその様子を時空間の海の遠くからうかがうことができたのなら、その目にはひどく強大な要塞のように映ったことだろう。

その本局は、時空航行船のプラットホームの意味合いが強く、今日も多くの巡洋警備艦や輸送船だんが行き交い、本局は相変わらずの賑わいと忙しさに包まれていた。

「それじゃ、なのは。ヴィヴィオとユーノによろしく」

本局の一角、執務官の宿所が並ぶ一室で、長い航海任務を終えたフェイト・Ｔ・ハラウンが久しぶりに親友と声を交わしていた。

「うん、フェイトちゃんもお仕事がんばって、あんまり無理しちゃだめだよ？」

澁刺としたその声は、大人びた雰囲気よりもむしろまだ成熟仕切らない少女のような様子を与えていた。

通信モニターに映し出された彼女は、フェイトの無二の親友であり一番大切な人、高町なのはだった。

「クス、なのはみたいな無茶はしないよ」

フェイトは、幼なじみの過去の無茶ぶりを思い浮かべ笑みを浮かべた。

「そ、それを言われると困っちゃうな」

現役時代の無茶な戦闘と魔術行使。それをある程度は自覚しているの、なのはは苦笑を浮かべながらサイドポニーの髪をいじった。

既に一度さよならを交わした二人だったが、それからしばらく過去の思い出話に花を咲かせ、結局通信を終えるまで１０分ほどかかってしまった。

「それじゃあ、フェイトちゃん。久しぶりにもらったお休みなんだから、ちゃんと体を休めないとだめだよ？」

「うん、なのはも。今は忙しい時期だからしっかりね」

そうして二人は手を振りながら通信を切った。

通信を終え、フェイトは短く息を切った。

「なのは、幸せそうだったな」

フェイトはブラックアウトしたモニターに目をやり、今は遠い彼女のことを思いやった。

なのはは半月ほど前、突然管理局を辞めてしまった。その話を航海任務中に聞かされたフェイトは思わず任務を切り上げて陸に上がろうとしてしまうほど驚いていた。

そして、呆然としたまま航海任務を終え上陸したフェイトは、その後の業務を副官のシャリオに任せ、急いでなのはの元に走った。しかし、なのはがそれまでにすんでいた教導隊宿舎には既に彼女の部屋はなく、改めて送られてきたメールを読み直し、彼女の住まいに気がついた。

そこにかかれていた住所は、時空管理局本局、無限図書司書長ユーノ・スクライア邸のものだった。

上陸期間は短いものだったが、フェイトはその足で本局にとんぼ返りし、ただ一日だけの有給を取り、スクライア邸に駆け込んだ。スクライア邸はユーノが不在だったが、彼女の訪問を出迎えたのは親友なのはとその娘、ヴィヴィオだった。

既にそれから一週間ほどたっている。

突然の親友の来訪に驚いたなのはだったが、すぐに柔らかな笑みと共にフェイトは居間へと通され、なのはと話をした。

様々な近状報告をする二人、そしてなのはがユーノと婚約していたことにも驚かされたが、いずれそうなるだろうと思っていたフェイトにとってはむしろそれは自然に受け入れられたと本人は感じている。

しかし、フェイトがなぜなのはが局をやめたのかと聞いたとき、なのははつらい表情を浮かべ、ただ一言こう告げた。

「私には、覚悟がでなかつたんだよ」

何の覚悟なのか、そのきっかけは何だったのか。その一切になのは口を閉ざした。

フェイトは親友の頑固さを知っていたため、それ以上のことを彼女から聞き出すことは不可能だと思った。

その後、フェイトはなのはと夕食を取ることを約束し、ユーノにも伝えてくると行ってスクライア邸を後にした。

フェイトはそのまま無限書庫へと向かい、未だ業務中であったユーノを執務官権限で呼びつけると、どういふことか問いただした。

しかし、ユーノは一瞬寂しそうな表情を浮かべ、

「僕にも話してくれないんだ。調べても何も出なかった」

フェイトはたまらなくなつて無限書庫を後にした。

そして、夕食。久々に集まつた友人とその娘を交え、彼らは小さなホームパーティーを開いた。

ユーノはどこかで食事を提案したが、フェイトが是非ともなのはの手料理が食べてみたいと言って譲らず、なのはもそれを快諾した。久しぶりの一緒に食事、

「はやてちゃんも誘えばよかったね」

と言うなのはだったが、フェイトは、

「誘ってみたけど、忙しくてこれないみたい」

と答えた。

「残念だね」

ユーノも微笑み、そして過去の話に花を咲かせた。

いつの間にか酒も入り、終始穏やかに時が過ぎていった。

そして、ヴィヴィオが眠気で船をこぎ始めた頃にはパーティーはお開きとなり、その後は大人だけの空気が広がっていった。

そして、フェイトは二人に、なのはに聞いた。

「どうして、管理局を辞めたの？ あれだけ夢があつたのに」

ユーノもそれに黙って従い、穏やかな視線をなのはに向けた。

しかし、なのはは答えなかった。

「まだ、私の中で吹っ切れてない部分があるんだ。それに、これは

終身の秘匿義務が課せられていることだから。私の口からはいいない」

しかし、なのはは約束した。

「いつか言えるときが来たら、そのときは必ず伝えるから。お願い、それまで待つて」

フェイトはそんな彼女のまぶたから一条の雫が浮かんでいることに気がつき、それ以上は聞くことができなかった。

「ごめんね。二人にはつらい思いばかりさせてるね。本当にごめんなさい」

ふさぎ込みそうになるなのはを、ユーノは「いいんだ」と言っただけ、そのまま二人は連れ添って寝室へ入った。

ヴィヴィオの横になのはを寝かせたユーノは再び居間へと戻り、フェイトとしばらく話を続けた。

そのときの話の内容、ユーノと誓った一つのこと。フェイトははつきりと覚えていた。

「なのはは話せないといったけど、僕は知りたいんだ。これはとてもリスクの高いことだけど、僕は今でも調べ続けている。だから、フェイトも協力してくれないか？」

フェイトは迷うことなくそれを承諾した。かくして、二人の間に誓いの杯が交わされたのだった。

そして半月。フェイトは行宛のない調査を続けている。しかし、執務官といえども限られた権限の中では集められる情報は少ない。

しかし、彼女はテーブルに置かれた資料に目をやった。

『【永遠の箱船】事件に関する調査報告書』

彼女は、その事件が何らかの関わりを持っているのではないかとにらんでいた。しかし、その公式文章の中には、時空管理局が関わったという記載はなく、それは単に災害として処理されたという記述だけだった。

そして、彼女はその重要参考人として登場する二人の元時空管理

局魔導師、レイリア・フォートとエルンスト・カーネルに目をつけた。

第一級広域指名手配犯として記録された彼らは、なのはが管理局を去った理由を持っているのではないか。

もしも、彼らがなのはに対して何らかの不利益になるような行いをしたのであれば、フェイトは絶対に彼らを許さないと誓った。

そして、自らの手で彼らを逮捕してみせる。そう考えていた。

思案の海に沈むフェイトを掬い上げたのは、突然鳴り響いた呼び鈴の音だった。

「はい、どちら様？」

フェイトは、玄関先のモニターを立ち上げそれに目をやった。

「フェイトさん。リンですよ」

そこには手乗りサイズの少女が満面の笑みを浮かべて手を振っているのが映っていた。

「リンフォース？ どうしたの」

それには流石のフェイトも驚きを隠せなかった。はやてが訪ねてくるのは分かる。しかし、リンフォースIEIだけがやってくる状況など、フェイトには想像もできなかったのだ。

「えへへ、驚きましたか？ フェイトさんが帰ってきているって聞いて、お仕事ついでで寄らせてもらったですよ」

につこりと微笑むリンフォースIEIにフェイトも表情を崩し、すぐにドアのロックを解除し彼女を部屋に迎え入れた。

「お久しぶりです、フェイトちゃん。元気でしたか？」

ドアを開けるとすぐに彼女はフェイトの胸に飛び込んできた。

「うん、私は元気。リンも、元気そうだね。はやての様子はどうか？」

懐かしい友人のパートナーの訪問を喜びつつ、フェイトは彼女をなでた。

「はやてちゃんは相変わらずお仕事に忙しいみたいです。最近、特務機動中隊に移動になって、その部隊長代理をしているですよ」

特務機動中隊という言葉聞いて、フェイトの表情が一瞬凍った。そして、リインフォースEEはそれを見逃さず、表情を落として彼女の胸から離れた。

「やっぱり、気がついていたですか」

リインフォースEEは傍らのテーブルに置かれた書類を一瞥し、はやての読みは正しかったことを理解した。

「それは……」

フェイトは何かを伝えなくてはならない、弁解しなければならないと思います口を開こうとするが、リインフォースEEの満面の笑みの前に口を閉ざした。

「それですね。はやてちゃんが久しぶりに会って食事でもしようというので、リインがお使いを頼まれたのですよ」

今は言うな、何処で監視されているか分からない。フェイトはリインフォースEEの表情が告げるそれを飲み込み、自身も自然な笑みを浮かべた。

「私は大丈夫。久しぶりに上陸休暇をもらったから、向こう一週間程度はあいてる」

「そうですね、だったらはやてちゃんから追って連絡してもらいますね。リインはそれだけ伝えに来たです。それではお仕事もありますので、これで失礼しますね」

仕事とは、それを伝えに来たことなのではないか。フェイトはそう確信するが、それを口にはしなかった。

そして、立ち去るリインフォースEEを呼び止めた。

「そういえば、ユーノもはやてと会いたがってたよ。彼も誘ってもいいかな」

それは、暗示だった。そして、フェイトは完璧な演技をした。

リインフォースEEはEEそれを正確に読み取り、笑みを浮かべ、
「もちろんですよ。はやてちゃんも喜ぶと思います。ユーノさんの方にはリインの方から伝えておきますので、フェイトさんから連絡しなくてもいいですからね」

「うん、お願いね。ユーノ、忙しいから滅多に会えないかもしれないけど」

「それは、リインにお任せです」

リインフォースEEはそういつて胸を張って答えると、フェイトの部屋を後にした。

「はやても知りたがつてる。そうよね、なのはのことだもの。無視はできないよね」

リインフォースが去った部屋の中央で、フェイトはそうつぶやき、もう一度テーブルの資料に目を通し始めた。

第四話 ベルクト

武装隊施設群の正門で出会った少女は、八神はやての指令でアグリゲット・シエイカー副部隊長が探してきたという補給人員だった。エリオンは道行く途中でそれを聞き、クロエ本人も彼が機動中隊の武装魔導師だったこと、そして自分と同年代かそれよりいくつかな下に見える彼が下士官だということにも驚いていた。

いや、実際彼らの年齢で既に士官の階級を持つものも少ないのだが、たたき上げであるエリオンがその年代で二等空曹であることは確かに驚きに値するだろう。

クロエとエリオンはそのまま部隊長室へ足を運び、ちょうど業務中であつたはやてと面会を果たしたのだった。

机の上の書類の山をにらみつけながら、「やつぱり、どっかからか教官を呼ばんとあかなあ」とつぶやいていたはやては、来室した二人をみて相好を崩した。

「失礼いたします、八神はやて二等陸佐、特務機動中隊部隊長代行。自分はクロエ・ルディア空士長であります。このたび、人事部より当部隊への移動命令を受理し、本日付で特務機動中隊武装A分隊に着任いたしました」

クロエは最敬礼をはやてに送りながらそういい、はやても机越しに敬礼を返した。

「ようこそ、機動中隊へ。中隊は貴方を歓迎します。って、堅苦しき挨拶もなんやし、リラックスしてくれてええからな。今、Aチームの隊長を呼んだからちよつと待つてて」

はやての言葉に、拍子抜けしたようにクロエは、「はあ」と答え、そのまま休めの姿勢でその到着を待った。

「それにしても、よう来てくれたなクロエちゃん。アグリゲット副部隊長の話やと、かなり優秀な魔導師で、局の新装備トリアルにも参加してたつて言う話やん」

はやては昨日送られてきた新人、クロエ・ルディア空士長のプロフィールを思い出していた。

クロエ・ルディア。年齢16歳。時空管理局武装航空大隊【要撃ストライク・フォートレスの鉄槌】所属、空戦AA+ランク。

特にはやては、【要撃の鉄槌】から移動となったことに、素直な驚きを感じていた。

「クロエちゃんは、要撃の鉄槌から来たんやってな。要撃の鉄槌つていったら地上部隊の戦力の要、教導隊に次ぐエース達の集団やって話や。戦力増強としては言うことなしやね」

はやての素直な感想に、クロエは照れることもなく、ただ堂々と頷く。

「はい、お任せください」

それは、純然たる自信であり、自分自身がこれまで培ってきたことに対する誇りでもあった。

エリオンはそんな彼女を冷静に見つめていた。本当なら、エリオンの仕事はとくに終わり、クロエを案内し終わった時点で退出してもよかった。しかし、エリオンはどうにもこの少女のことが気になっていたのだ。

それは僅かな不信任感。エルンストという前例があったように、このタイミングで派遣されてきたことへの疑惑。その裏に潜むベルディナ・アーク・ブルーネスの影を感じ、エリオンははやての言ったクロエのプロフィールに対しても疑惑を持っていた。

しかし、クロエからはエルンストのような、自分自身を消耗品扱いするような雰囲気は感じられない。だが、レイリアという前例もある。彼は飄々とした雰囲気の中、彼の口からそうと知らされるまで自分自身を明かさず、完璧な演技を貫いた。

エリオンはただ、彼女の思惑が知れたかった。上層部からは殆ど音沙汰がないといっても、特務機動中隊は二名の犯罪者を排出した部隊だ。そんな部隊に望んで出向する人間が居るだろうか？しかもこの短期間で。

エリオンが疑問を持つのは確かなことだった。そして、同じ疑問をはやても持っていた。

しかし、はやての持つそれはエリオンのものと比べれば幾分か樂觀的なものであることも確かだった。

（なんで、この部隊に移動することを承認したんかは疑問やけど、まあ、変わりもんは居るっちゃうことやね）

そして、南雲から聞かされていた優秀な副部隊長の存在から、彼、アグリゲットの手腕によるものだとな納得できる。はやてはエリオンのように、クロエをエルンスト、レイリア、そしてベルディナとなげては考えていなかった。

そして、はやてとクロエの話が一段落したところで部隊長室の扉が遠慮深そうな音でノックされた。

「ああ、シグナムやな。入ってええよ」

その来客がシグナムであることを知っていたはやては快く彼女を部屋に通した。

「失礼いたします、主ははやて」

シグナムはそう折り目正しく一礼して部屋に足を運んだ。

「ルディア空士長、こっちがシグナム一等空尉や。シグナムには武装A分隊の隊長をしてもらってる。まあ、あんじょうやったってな」
はやての言葉にシグナムは最敬礼を送り、クロエと二言三言会話を交わし互いに自己紹介をしていた。

ストライク・フォートレス

その会話の一部で、クロエが元【要撃の鉄槌】隊員であることを口にした瞬間、シグナムの瞳が怪しく光ったことをエリオンは見逃さなかった。

（シグナム隊長の悪い癖が出た）

と思い、次の瞬間シグナムが訓練所に案内しようと言い出したことに非常に納得した様子だった。

シグナムは、既に自他ともに認めるところの戦闘狂というよりも戦闘中毒バトル・ホリックと言ってもいいほどの戦闘好きだ。

そして、今シグナムの目の前には地上の要ともいえる猛者達が集

う【要撃の鉄槌】の元隊員が居る。これは腕試しをしてみなくてはと思うのは既に必然と思えた。

そして、エリオンもその彼女の戦力には多大な興味がある。

「そこそこにしたりな、シグナム」

既にこの後何が行われるのかを確信したはやては、ただ一言自らの守護騎士に言うだけでそれを止めようとはしない。

シグナムは、それに敬礼で答え部下の二人を引き連れ部隊長室を後にした。

三人が退出し、部隊長室にははやてのみが残された。はやては、再び席に着くと、待機状態にしていた端末の通信を立ち上げ、待たせていた連絡主に簡単な詫びを入れた。

「もうええよ、リイン。それで、どないやった？」

その端末のモニターに出現したリインフォースIEはクッキーと紅茶を片手にくつろいでおり、はやてが急に回線をつないだことに驚いて居住まいを正した。

「は、はいです！ フェイトちゃんの方はOKだそうです。航海任務が終わってしばらく休暇をもらったらいいですから、はやてちゃんの予定に合わせるらしいです。それと、フェイトちゃんの話なのですが、ユーノさんもこの件に協力してくれそうなのですが」

どうやら、リインフォースは言われたとおりの仕事を果たしたらしい。

「そうか、ありがとな。それやった、ユーノ君の所にも行ってきてもらえるか？ 協力してくれるんやったら是非ともお願いしたいしな」

「もちろんです。リインにお任せです」

「やったらお願いな。フェイトちゃんの方には予定が付き次第、うちから連絡をとるさかいに」

リインは最後に「分かりましたです」と敬礼をし通信を切った。

「やけど、ユーノ君も忙しいしな。たぶん、会うのは無限書庫になるやろな。まあ、ええか。ついでに何か本でも借りにいこ」

こうやってリインをお使いに行かせることは、それほど珍しいことではない。様々な事件を解決した立役者であるはやては、その分敵に回す人間も多く、自身を監視する目も多いことを自覚している。そのため、クロノ執務官提督の妹であるフェイトや無限書庫の名実共にトップに君臨するユーノ・スクライア司書長と面会することさえはばかれる様子だ。

（ほんまに、動きにくい体になったもんや）

人の上に立つことを選び、それを全うしていけば行くほど自由を抑圧される自分自身にはやては深くため息をついた。

戦線は膠着していた、ように見えた。しかし、現状を見てどちらが有利なのかを判断することは難しくない。

エリオンは、そんな二人をモニターと双眼鏡を使用してただ傍観していた。

「流石だ、ルディア空士長。まさか、ここまで手こずるとは思ってもよらなかった」

肩を上下させ、荒い息を吐くシグナムの目はそれでも歓喜に満ちあふれていた。

「シグナム隊長も流石ですねえ、本当は最初の一撃で決めるつもりでしたのに」

クロエもシグナムと同様、額に汗を浮かべつつ手に持つ杖型デバイスを再度彼女に向ける。

「まさか、高町と同程度の砲撃が来るとは思わなかった。さすがは元【要撃の鉄槌】ストライク・フォートレスということか」

会話を交わしながら整えられた呼吸を持って、シグナムも再度手に持つ古代ベルカ式デバイスシステム、剣型デバイス【レヴァンテイン】を構え、カートリッジをロードする。

「私のデバイス【ベルクト】があれば、あれ位はお手の物です」

クロエもまた、自身のデバイスのカートリッジ、いや、バッテリーを交換した。

「新型航空支援機器搭載型キハイル式デバイスシステムか。あれは、確かにやっかいだな」

エリオンは彼女の持つデバイス「ベルクト」を見てそうつぶやいた。

「なあ、大丈夫かよシグナムの奴。あれ、やべえんじゃねえの」

エリオンの隣で固唾をのんでそれを見守る小さな人物、シグナムのパートナーであるアギトは心配そうな声でエリオンの肩に乗った。「シグナム隊長は歴戦の勇士。それに対してクロエは優秀といってもまだまだ経験が不足している若手の航空魔導師。天秤はまだシグナム隊長の方に傾いていますよ」

エリオンはそういつてアギトをなだめすかすが、横目で見た「ベルクト」の諸元をみて、その天秤もひよつとすれば逆に傾くかもしれないと密かに思った。

クロエ・ルディア空士長。その魔力値は確かにAA+ランクの航空魔導師としては問題ないレベルだ。しかし、彼女の持つデバイスに搭載されたバッテリー。

以前、レイリアが持ち今ではエリオンも所持しているキハイル式カートリッジの発展完成形ともいえるそれは、大規模な魔術運用にも対応するほどの魔力を蓄積している。

そして、エリオンが見積もったところ彼女はそれを三機、先ほどパージした一機をのぞけば残り二機の残量を持つこととなる。クロエの魔力量とバッテリーの魔力量をトータルすると、それは下手をすれば高町なのはの持つ魔力量に匹敵するかもしれない。

そして、新型アビオニクスによる情報支援。

エリオンは、間違いなくこの戦場を支配しているのはクロエの方だと確信していた。

エリオンは自身のデバイス「ラプター」を握りしめた。つい最近まで最新鋭だったこのデバイスも「ベルクト」の登場で陳腐化する

のにはそれほど時間がかからないだろう。

昨今のデバイスの進化発展は目を見張るものがある。そして、いずれかはその速度に人間の方が着いていけなくなる日が来るだろう。ならば、そのデバイス进行操作するためのデバイスが必要とされる時が来るかもしれない。そうなれば果たして、人間がデバイスを使うことに意味は見いだせるのだろうか。

エリオンはその考えを頭の隅に追いやると、再び活動を開始した戦場へと視線を向けた。

「あれだけの高速機動を行いつつ、これほどまで正確な射撃を行うとは。予想以上だ、ルディア空士長」

天秤は逆に傾きつつあった。シグナムは、最後に一つなったベルカ式カートリッジを【レヴァンティン】に装填しつつ、防戦一方になっている状況への打開策を探していた。

（懐に入ればいい。だが……）

高速追尾弾がら発まとめて飛来し、シグナムはそれを打ち払いつつ一直線にクロエへと向かう。

そして、次に来るもの。障壁貫通性能を持った無制御高速弾、総数12。

「くっ！」

シグナムはその弾頭の合間を縫って飛行を続けるが、高密度に飛来するそれらを完璧には避けきれず、甲冑の数力所に亀裂を作り上げた。

それでもクロエとの距離は詰まる、シグナムは剣を肩口に構え、ベルカ式カートリッジの力を解放し一気に加速、その懐へと潜り込もうとした。

「紫電一閃！」

その刀身は赤い炎を纏い、爆発的に開放されたエネルギーはまさに北欧神話の炎の巨人スルトの剣を思わせる。

世界の終わりを彩り、神々の楽園を焼き払ったその炎から逃れられるすべはない。

しかし、確かに捕らえたはずの目標は不規則な揺らぎと共にシグナムの視界から消え去る。

「ちい！」

シグナムは殆ど当てずっぽうに振り切った刀身を捻り、自らの胴回りを軸にしてそれを反転。横一文字に大気を切り裂いた。

乱数回避。それは、シグナムなど真つ向勝負を生業とする剣士にとつてもつとも苦手とする戦法に違いなかった。

シグナムは振り切った自らの刀身が何者にもふれなかったことを瞬時に判断し、離脱を決定した。

「レヴァンティン、 シュランゲフォルム ！！」

その咆哮と共に、【レヴァンティン】は自らの刀身を多くに分割し、まるで刃のついた鞭のような形状へと変化した。

そしてその鞭先は、回避を終了し再び高機動へと移行しつつあったクロエのデバイス【ベルクト】にからみつき、その行動を止めた。

「もらった！」

シグナムは腕の力にものを言わせ、【レヴァンティン】を跳ね上げる。

「しまった！」

クロエはその力にあらがうことができず、その手から【ベルクト】を取り落としてしまった。

「これで、終わりだ！」

ようやく訪れたチャンスを、シグナムは一瞬たりとも無駄にせず、無防備となったクロエに向かってまっしぐらに突き進んだ。

レヴァンティンの刀身を元に戻し、まるで夜空を貫く帚星のごとく圧倒的な速度をもつただ一点へと突き進む。

シグナムとレヴァンティンは勝利を確信した。

その言葉を聞くまでは。

「ベルクト、自動制御、全弾発射、攻撃開始！」
オート・インターセプション コントロール・オープン

クロエはそう叫び、自身は自らのすべてをかけその前方に防御障壁を展開させる。

『Yes, Master』

そして、先ほどまで地上へと自由落下を続けていたはずの【ベルクト】はその落下を止め、自らの矛先を飛翔する帚星へと向け、そして幾数十もの光弾を発射した。

「な、に!？」

シグナムはその力のすべてを速度と剣へとかけていた。故に、その攻撃を確認してから防御、回避へと回るすべを持たない。

それでも何とか体を捻り、たいした追尾機能を持たない光弾を避けようとするが、そのうちの数発が着弾した。

エリオンは、ブザーを鳴らし戦闘終了を告げた。

「完敗だ、クロエ空士長。まさか、本人の手を離れてもなお攻撃を加えるデバイスとは、思いもよらなかった」

戦闘終了後、瞳に涙を浮かべてシグナムの胸に飛び込んできたアギトをなだめすかしながら、彼女は所々に付いた傷の鮮血をぬぐいながら、それでも爽やかな表情でクロエを祝福した。

「あれは最後の最後、緊急時のオートプログラムです。実際、あれを使わなければならなかったのは初めてですよ。流石です、シグナム隊長。剣の騎士の異名を痛感しました」

最後の最後、自らのデバイスが放った攻撃にさらされたのはクロエも同じだったらしく、防御障壁のいくつかをいくぐって飛来した魔術弾頭でその体は何力所かに負傷をしていた。

「クロエ空士長の勝利。ですが、僕の目からは互角といったところですね」

エリオンはそのすべてを冷静に見ていた。そして、その目から先ほどの戦闘で二人の利点と欠点もいくつか発見していた。

「ただとよう、あたしとユニゾンしてたらきつとシグナムの勝ちだったぜ」

アギトはそういうが、シグナムはその頭に手を置き、静かに首を振った。

「それならば、ルディア空士長もまだ奥の手を隠している。互いの奥の手を明かさないうちでの全力だ。この結果には何も変わりはない」シグナムは勝っても負けても遺恨を残さない、そしてたとえどうであろうと、最後が自身の油断から来るものであっても、その油断は自身の未熟さが招いた結果として心の奥へとしまい込む。

シグナムは何処まで行っても誇り高き騎士だった。

エリオンはクロエの表情を伺い、そして眉をひそめた。

彼女はシグナムとアギトを見つめ、どこか悲壮な表情を浮かべながら自らのデバイス【ベルクト】を握りしめていた。

「クロエ空士長。どうかしたか？」

エリオンは彼女に声をかけた。

クロエは驚いた表情で何度が瞬きをし、表情をただした。

「いいえ、何でもありません。リーファ副隊長」

クロエは、エリオンが自分より上官であることと機動中隊の副分隊長であることに驚いたが、公私混同をしない質なのか、年下の彼にも敬語を使っていた。

「そうか、ならばいい。それと、僕のことはエリオンと呼んでくれ」そして、エリオンもなれないままに彼女の上官であることを決めた。

「はあ、ですが……」

クロエが困惑する理由も、エリオンにはよく理解できる。それほど親しい仲でもなく、さらには上官と下官の関係であるため、その相手をファーストネームで呼ぶことには抵抗があるのだろう。

「フフ、ルディアが困惑するのも分かる。しかし、このエリオンには双子の姉が居るのだよ。今は分けあって離れているが、いずれ戻ってきたときのためにな」

事情を知るシグナムは薄い微笑みを浮かべながらエリオンを支持した。

「はあ、そうですか。了解しました、エリオン副隊長」
クロエはそういつて敬礼を浮かべた。

（できれば、その副隊長もやめてほしいんだけどな）

とエリオンは思うが、これ以上は公私混同につながるとしてそれを甘んじて受け止めた。

「さて、思ったより時間がかかってしまったようだ。そろそろ昼食頃だが、二人はどうする？ 一緒に行くか？」

シグナムはそんな二人の様子に笑みを浮かべると、二人を食事に誘った。

「ええ、一緒させてもらいます」

エリオンは、近頃では日課になっているシグナム達との食事を快諾した。

「では、私も」

クロエもそれに応じ、未だセツアップしていた【ベルクト】を待機状態に戻しそれに従った。

「では、行こう。人が少なくなったとはいえ、昼食時の混雑は未だ健在だ」

三人はそうして、一端デバイス保管庫に足を運びそのまま連れ立って食堂へと向かっていった。

その光景を少し高い場所、部隊長室の窓から伺っていたはやては、そんな三人の様子を見て、にっこりと笑みを浮かべていた。

「やけど……」

と、彼女の表情が僅かに陰る。

「シグナムに勝つとは、うちも少し甘くみとったようやな」

今のところクロエには怪しいところはないし、仲間とも問題なくうち解けている様子だ。しかし、はやてはどうしてもクロエに対する警戒が解けない自分を自覚していた。

「あかんな、部隊長が隊員を信頼できへんなんて。これやと、白貴君に叱られてまうな」

はやてはあの事件を境に失踪してしまったかつての部隊長、かつての後輩であり親友でもあった彼の表情を思い浮かべた。

「どこ行ってもうたんやろ。はよう、帰って来てほしいな」

彼は時空管理局内でも珍しいはやての理解者だった。そんな彼が今はここには居ないことにはやてはどうしようもない寂しさを感じていた。

第五話 裏切り

「お帰り、ユーノ君。今日は早かったんだね」

仕事を早めに切り上げ、ユーノ・スクライアは自宅へと帰っていた。

なのはは帰宅した婚約者に労いの言葉をかけ、既にできあがっていた食事を温め直し彼の遅い夕食を見守っていた。

「最近、資料請求の数も少なくなつて。それに、書庫もだいぶ整理が付いてきたからね。この間人員が増員されたのもその理由かなとにかく、ずいぶん仕事が楽になったよ」

ユーノの言葉になのははニコニコと笑顔を浮かべ、彼の話に耳を傾けていた。

「そういえば、フェイトちゃんから聞いたんだけど。最近ユーノ君とよく会つてるって。どうしてなの？」

ユーノとフェイトは幼い頃からの親友同士で二人が顔を合わせるのは別に悪いことではない。ただ、婚約者のユーノが他の女性と頻繁に会うことには、なのはは少し嫉妬を覚えていたのも事実だ。

「ん？ フェイト？ そういえばそうだね。いや、フェイトが捜査資料がほしいってことだけだよ。フェイトは今、何か大きな事件を追っているらしくてね。詳しいことは知らないけど」

ユーノはそう答えた。

「そうなんだ。フェイトちゃんも忙しいんだね。何の事件なのかなあ」

なのはは親友のがんばりに賞賛を浮かべるが、同時に無理をしすぎていないかどうか心配にもなった。

なにぶん、彼女の周りのものはユーノを含めて過剰に努力をしすぎるものばかりなのだ。なのはもその一人だった分、その心配はまっとうなものだった。

「何でも、犯罪者の捜索らしいよ。たしか……そうだ、レイリア・

フォートとエルンスト・カーネルだったかな。それと【永遠の箱船】に関する資料も要求されたかな」

なのはは、持っていたグラスを取り落とした。

そして、ユーノは心の中奥底で「あたりだったか」と実感した。

「どうしたの？　なのは」

ユーノは笑顔が消え、茫然自失とするなのはの表情を伺う。

しかし、なのははすぐに不自然な笑みをその表情に貼り付け、

「何でもないよ。私、ヴィヴィオの様子を見てくるね」

といってリビングを後にした。

「なのは……」

ユーノは愛しい婚約者の心の傷にふれてしまったことに罪悪感を持ちながらその背中を見送った。

「それで、ユーノ。どうだった？」

次の日、無限書庫の司書長室の回線に連絡をしてきたのはフェイトだった。

「ビンゴだと思う。十中八九ね」

ユーノは書類の処理から手を離さずにそれに答えた。

「そう、だったら……」

フェイトは、自分の考えが正しかったことを実感し少し穏やかな表情を浮かべていた。

「だけどね、フェイト。僕達は、そうするべきなのだろうか」

しかし、フェイトのその表情は続くユーノの言葉にかき消されることとなる。

「どういうこと？」

フェイトは怪訝に思った、なのはがああなってしまった原因を探ることで一致したはずの親友がまさかそんなことを言い出すとは思っても寄らなかったのだ。

「僕達は、いたずらになのはの傷に触れて。その傷口を抉るようなことをしているのではないかって思ったんだ」

ユーノの口調は真剣そのものだった。

「それは、だけど」

フェイトは表情を落とし、言葉をつなげようとしたができなかった。

「昨日の晩。僕がなのはにカマをかけたとき、なのは本当に辛そうだった。僕は、なのはにあんな顔をさせるためにこれをしてるのではない」

「……………」

フェイトは何も答えられなかった。親友を傷つけない、それはフェイトも同じだった。ましてや、婚約者であるユーノにとってそれはどれほどの苦痛なのだろうか想像も付かなかった。

「なのはは管理局を辞めた。その理由は分からないし、知りたいとも思う。だけど、僕達がすべきなのはそんなのはの意志を尊重することであって、その傷を開くことじゃないはずだ」

「ユーノ」

フェイトはその言葉に反論の声を持たなかった。

「知るべきことと、知らない方がいいことがある。ごめんね、フェイト。僕はこの件からは降りるよ。だけど、フェイトが必要とする資料は提供する。あくまで執務官と僕の権限の範囲内だけど」

それは事実上、ユーノはフェイトの協力を破棄したと言うことになる。フェイトにとっては、約束が違ふということになるが、ユーノのその言葉を聞いてしまえば、むしろなのはを裏切っているのは自分なのではないかと思えてしまったため、何も言えなかった。

「クロノにでも相談するといい。きっと君の兄は君の味方だから」

「うん、そうする。ごめんねユーノ。巻き込もうとしちゃって」

「いや、謝るのは僕の方だ。結局君との約束を反故にしてしまうんだから」

「いいの。ユーノの言うとおりだから。それじゃ、切るね」

「うん、さよなら、フェイト」

そうしてユーノは通信を切った。

「これで、よかったですね？」

ユーノは自身の執務室の入り口のドアに背を預ける人物に目を向けた。

「上々だ、スクライア司書長。なかなか見事な演技だった。」

その人物は少しおどけた仕草でそう言葉をつなげるが、ユーノはそれをにらみつけた。

「演技じゃありませんよ。全部僕の本音です」

「ならばなおよし。それこそ信用に値する人物と言うことだ」

「結局、僕も貴方に利用されるということですか？ ベルディナ・アーク・ブルーネス」

ユーノの鋭い指摘を受け、入り口に立つ人物、ベルディナはゆつくりと口の端を持ち上げた。

「利用できるものはすべて利用する。その間に信頼関係も何もいらない。ただ、相手の技術を信用できればそれでいい。それに、君と俺の利害は一致していると思えるがね。スクライア司書長」

ユーノはその言葉を無視し、椅子から腰を上げ傍らのコーヒーマーカークからカップにそれを注ぎ込み、一口飲んだ。

「結局。僕は、婚約者だけでなく親友さえも裏切ってしまうことになる。その責任は貴方にある」

「当然だ、すべての責任は俺のものだ。君たちの親友が被る必要もない悲劇を被ることも。それでいくらかの人間が命を落とすこともすべて俺の責任だ。俺はそれから逃げたりはしない」

ベルディナはそういうと司書長室を後にしようとする。

「連絡は追ってる。それまでに体制を整えておいてくれ」

ユーノはそれに目を向けず、ただ「了解」と答え、カップの中身を一気に飲み干した。

「……ごめんね、なのは、フェイト、そしてはやて」

第六話 出勤

輸送ヘリに乗り込む面々の表情には特に困惑や緊張というものが浮かんでいなかった。

エリオンは、上空高くを高速で巡航するヘリの窓から遠ざかるミッドチルダの都市群を見下ろしていた。

「何が見えるの？」

そんなエリオンにクロエは声をかける。

「街が見える」

エリオンはただ素っ気なく答え、再びその街に目をおろした。

「何かおもしろいものでも見つかったか？」

エリオンの正面の席で、既に甲冑と剣を身に纏っているシグナムは腕と足を組みながらそんな二人を見つめていた。

「いいえ、特には。ただ、こうしてみるとちつぽけなものだなと思ひまして」

エリオンはただじつとそれを見つめるばかりだ。彼の目に映る町並みは、既に人の行き来も車の流れさえも認識できないほど小さくまとめられている。

科学技術と魔法技術によって発展したその町並みもそれから一歩はずれば深緑の支配する自然が囲み込む。それはまるで、自然の一部を切り抜いて必死に居場所を主張する箱庭のように見え、エリオンにはそれがどこか滑稽に思えた。

「おーほんとだ、ちいせえなあ」

エリオンの側にアギトも訪れ、彼と共にその町並みを見下ろした。「鳥は、いつもこんな風景を見下ろしているのかしらね」

クロエはそういつつ、自身のデバイス【ベルクト】の調整に入った。

「だったら鳥は、この風景を見て何を思っているのかな」
エリオンの言葉にアギトが口を挟む。

「きまつてんだろ？　したにいる奴らは何で上に揚がってこねえの
かなって思ってたんだよ」

エリオンはその答えに笑みを浮かべ、「そうかもな」と言ってア
ギトの頭をなでつけた。

「そろそろ到着ですよ、姐さんとチビども」

ヘリの操縦士、かつては機動六課の輸送を担当していたというヴ
ァイス・ゼランセニックが通信機越しに目的地の到着が近いことを
伝えた。

「ご苦労だ、ヴァイス陸曹。やはり、お前の操縦はどこか心が落ち
着く」

シグナムはそういつて目を閉じた。

「いやあ、姐さんにそういわれると照れますね。ま、事故のないよ
うに努めますよ」

ヴァイスはそう答えると照れくさそうに鼻の頭をかき、ゆっくり
と操縦桿を前方へと押しやった。

エリオンは、外に広がる風景が徐々に近づいていくことに気がつ
いた。それで居て、ヘリ本体は実に穏やかな挙動で安定を保ってい
る。

なるほど、優秀なヘリ操縦士ということだ。

エリオンは、近づいてくる目的地を見据え、自分のデバイスの最
終調整に入った。

その任務が入ったのは、午前の訓練の最中のことだった。

あれ以来、クロエ以外の補給要員のめどが立たないことから彼ら
は三人による連携戦術に重きを置き、その相手をガジェットや模擬
人体などに様々なに変更させ訓練を行っているところだった。

そして、八神はやて部隊長から直々に呼び出された先には調査任
務の命令が待っていた。

「任務といってもたいしたもんやあらへん。最近になってミッドチ
ルダの北東の岩山地帯にデータにない、そうやな、遺跡みたいなも

んが発掘されたらしいんや」

はやてはそういうと、不在のリインフォースエエに変わってモニターを操作すると、その遺跡らしきものをモニターに映し出した。

アギトはリインフォースエエが居ないことに託けて、はやての頭の上にあぐらをかきそれを眺めた。

「遺跡つつーかき、洞穴だよな、これ」

アギトの言葉に呼び出しを受けた一同はうなずいた。

山の岩肌にぼっかりとあけられた横穴は何の変哲もない自然構造物のようにも見える。そんな場所に何があるのかと聞かれれば誰もが首をかしげるしかないのも事実だ。

しかし、はやては首を振りそれを否定した。

「確かに、うちも始めてみせられたときはそう思ってたよ。せやけど、遺跡調査の先遣隊が中でよくないものを見てしもうたらしくてな。何人が殉職しとる。うちは、ちよう（ちよつと）危険な臭いがしたんや。せやから、この件はうちが受け持つことにしたわけや」

危険な臭いと聞かされ、シグナムは眉をひそめた。

「それは、ロストログア古代遺物に係るもの。ということですか？」

ロストログア。その言葉に一同の表情は凍り付く。

「せや。調査団の報告によると、この遺跡は地層やら年代測定やらしたところ、どうも数百年どころやないほど昔からそこにあったみたいなんや」

「それで、先遣隊が受けた被害。確かに、これは僕達の管轄になりますね」

はやての言葉にエリオンは納得したように頷いた。

「私たちの任務は？」

クロエも口を挟む。

「この遺跡の調査と、中に眠つとるかもしれんやつかいものの回収もしくは破壊。つまりはいつも通りのことやな。調査辞令と戦闘許可はもう受理されとるから、早速行ってもらえるか？」

はやてはモニターを閉じ、椅子をくるっと回して四人に目を向け

た。

「は！ 直ちに行動を開始します」

シグナムはそう答え、最敬礼を送り、他の三人をつれ部屋を後にした。

「あ、そうや、シグナム」

部屋を出ようとした彼らに伝え忘れたことがあったことを思い出し、はやては彼らを呼び止めた。

「なにか？」

「今日はうち、ちょっと用事があって午後からはでなあかんねん。報告はアグリゲット副部隊長にしといてな」

シグナムは「了解しました。主はやて」と言い残し部屋を後にした。

「さてと、出かける準備せんとな。フエイトちゃんとユーノ君を待たせたら大事や」

はやてはそういうと、調査報告書と資料のデータが入ったディスクを懷にしまい自身も部隊長室を後にした。

「これは、どこからどー見ても洞穴だよな」

アギトはその入り口の周囲をくるくると回りながら、手にともした炎の光で中を探ってみた。

「確かに、一見すればただの自然のものに見えるね」

エリオンは今にも一人で奥に進もうとするアギトを捕まえ、自身の肩に乗せた。

『それでは、姐さん。俺はエアカバーをしつつ待機します』

ヘリからの通信で、ヴァイスはそう伝え彼はエリオン達を置いて上空へと登っていった。

シグナムはそれに答え、中に進むことを決定した。

シグナムの話では、ヴァイスは優秀な狙撃手だったらしい。とあ

るミスショットが原因でしばらくその現場からは離れていたらしいが、先のジェイル・スカリエッティの事件がきっかけでそれに復帰し、今も彼らを上空から見守ってくれている。

狙撃手と聞いてエリオンは今はなき彼を思い出した。

たとえヴァイスが優秀であっても、彼にはかなわないと思うその思念を打ち払い、エリオンは先行するシグナムとアギトを追い、自身も洞窟へと足を入れた。

「思ったより深いわね」

エリオンの後ろを歩くクロエは、照明の一切ない洞窟で自身のデバイスから光を出し周りを見回した。

「だなー。先が全然見えねえ」

シグナムより先行して道を照らすアギトもその先に終わりが無いように思えそうため息をついた。

「先遣隊は何処まで行ったのか。エリオン。何か分かるか？」

シグナムは油断なくあたりを見回しながら、気になった箇所を既に抜刀状態にある【レヴァンティン】でこつぎながらエリオンに意見を求めた。

「特に何も。足跡らしいものは見つきましたが、何かをこすった後とか、戦闘をした後などは見つかりませんね。もっと奥でしょうか」
エリオンも【ラプター】から出される照明を壁や足下、天井に向けてながらその壁面に何の痕跡も残されていないことを報告した。

「そうか、ルディア空士長は何か感じるか？」

情報収集に長けるデバイスを持つクロエにシグナムは意見を求めた。

「いいえ。ただ、かなり奥の方から微弱な電子反応、そしてごく僅かに魔力反応があります。本当にごく僅かですが」

クロエの答えに、シグナムは「ふむ」と声を漏らし、歩きながら少し考える。

「そういえばシグナム隊長。気がついていますか？」

エリオンはそうつぶやいた。

「何をだ？」

「外との通信がとれなくなっています。先ほどヴァイス陸曹に外の様子を聞こうとしたのですが、応答がありません」

エリオンの言葉に、シグナム、クロエ、アギトも同じように外と連絡を取るうとした。

「確かに、何も聞こえねえな」

アギトは試しに、電子通信と広域念話も試してみたがそれもどれも何の反応も返さない。沈黙を守っていた。

「ということは、この岩の向こうには、念話も電波も遮断する何かがあるということですね」

そう思うとクロエは何の変哲もない岩くれの壁面がどことなく不気味に思えてきた。

「まあ、いいんじゃないの？ ヴァイスには心配かけるかもしれねえけどさ。それ以外は実害はねえってことだし」

アギトは気楽に言い、シグナムもそれに賛同した。

「そうだな。外の状況が分からないのは確かに心苦しいが、我らの任務は内部の調査だ。少し急ぐぞ」

シグナムはそういつて歩調を強めた。

「シグナムも、ヴァイスが心配ならそういえばいいのによ。相変わらず不器用な奴だぜ」

明かりも持たずにずんずんと先に行くシグナムに肩をすくめ、アギトもそれを急いで追った。

「ねえねえ、エリオン。シグナム隊長とヴァイス陸曹ってそういう関係なの？」

年相応に恋愛話には興味があるのか、クロエは声を潜めてエリオンに尋ねた。

「さあ、以前は一緒の部隊で働いていたらしいけど。そういう噂は聞かないな」

ただし、二人の間には確固たる信頼関係があることはエリオンも理解していた。ならばそれでいい、下手に藪をつついて蛇を出すよ

りはそのまま見届けるだけの方がいい、とエリオンは考えていた。

「ふーん。そうなんだ」

クロエは未だ興味津々に何かと考えているようだったが、「二人とも急げ」というシグナムの声にあわてて二人を追った。

洞窟は全くの一本道だった。通常なら幾重にも分岐し、それが侵入者を迷わせるための対策になるはずがそれも皆無だった。

エリオンは、わざと自分たちをここにおびき寄せているのではないかと一瞬考えてしまい【ラプター】を握りしめる手に汗が浮かぶ思いだった。

そしてその洞穴の行き着いた先、道行く先に僅かな光の漏洩を目にした彼らは一目散にそこに向かい、行き当たった広間に散会し油断なく周囲に気を配った。

その床の中央に置かれた何かを保存しておくためらしいカプセルの表面、そして周囲には何か赤黒いものがへばりついている。

それが、先遣隊の何者かが散らした血液であることに気がつくにはそれほど時間はかからなかった。

そして、周囲の壁面、アーチ状になっている天井にも同様のものがこびりついている。

相当強力な衝撃があつたはずだとエリオンは予想し、その広間の入り口付近で剣を構えるシグナムに目配せをしてカプセルへと歩み寄った。

クロエはエリオンのバックアップに入り、シグナムは【レヴァンティン】を上段構えにしすり足でエリオンの側面へと寄っていった。そして、エリオンはカプセルに手を置き、血に曇るそのガラス面を拭き取り、中を見下ろした。

「……………！！」

エリオンはそれと一瞬目を合わし、そして、高速で後ずさった。「何があつた？」

シグナムは、構えを崩さず一足飛びで彼の元に飛来する。

「どうしたの？」

クロエは動じず、そのままの位置で【ベルクト】をカプセルへと向けた。

「人？ 女の子？」

まるでそれはエリオンの呟きに反応したかのように、ゆっくりとカプセルの上面が開かれ、そこに眠っていた一人の少女を揺り起こした。

「……………」

シグナムもクロエも、それを油断なくにらみつけ、自身のデバイスを構えながらそれににじり寄っていく。

しかし、エリオンは自らのデバイスを下ろし、ふらふらとそれに近づいてくのだった。

「エリオン、危険だ！ 下がれ」

シグナムの鋭い声にもエリオンは反応せず、ただ彼女の目覚めを待つばかりだった。

そして、彼女は起き上がり、カプセルから足を下ろし、ふらつく足取りでエリオンの向かって両手をさしのべた。

「……………待っていた。貴方を……………」

そして、その両の手が彼の頬をなでたそのとき、彼女はまるでスイッチの切れた機械人形のようにその場に崩れ落ちた。

「君は、何者なんだ？」

彼女が床に身を横たえる前に、エリオンは彼女を抱え込み、その腕の中に彼女を誘った。

「これが、この遺跡の秘密なのか？」

シグナムは剣先を下に下ろし、エリオンの腕の中で息をせずに眠る少女を見下ろし、そう静かにつばやいた。

第七話 R a s i o

遺跡の奥で遭遇した少女はそのまま目を覚ますことなく、エリオンはそのまましばらく調査を続けたが、彼女以外のものは何も発見できなかった。

しかし、その遺跡には何らトラップになりそうなものはないと判断し、シグナムは少女と共に撤収を決定した。

エリオンは見た目よりもずいぶん重い彼女を背中に背負い込み、長い遺跡の一本道を帰る。

少女は眠り続けていた、いや、眠っているというのには語弊があるかもしれない。

エリオンは背中に張り付く少女の胸から何の振動も感じないことに不気味ささえも感じていた。

「大丈夫か？」

明らかに歩調が落ちているエリオンを心配してかシグナムが後ろを振り向くが、エリオンは、

「大丈夫です」

と答え、少し無理をして歩調を強めた。

そして、四人はそのまま洞窟を出て、そしてそこに広がる光景を啞然と見上げた。

『ようやくお戻りですか。できれば支援をしてもらいたいですがね』
上空から降ってくるようなヴァイスの声。見上げればそこにはエアカバーをしていたはずのヘリに多くのジェットが群がっている光景が映し出されていた。

「アギト、サポートを！」

航空がジェットの総数は40を超えている。シグナムはヘリを果敢に操縦しつつ、手に持つ狙撃銃で応戦するヴァイスを助けるべく、一気に上昇を開始した。

「紫電一閃！ はああー！！！」

既にローディングされたカートリッジを開放し、シグナムのデバイス【レヴァンティン】は群がるガジェットの一部を焼き払った。

「ヴァイス陸曹、無事か？」

シグナムは鋭くそういい、ヴァイスの安否を確認した。

『姐さんがいないって途方に暮れてた所です』

ヴァイスはシグナムの手前、開かれたヘリのキャノピーに片膝を付き、狙撃銃を構えていた。

「よし、サポートは任せた」

シグナムはアギトをヴァイスのサポートに回し、再び群がるガジェットと相対した。

それに一瞬遅れ、クロエは【ベルクト】を展開させる。

「エリオン副隊長、私が道を作ります。一度ヘリに帰還してください」

エリオンは戦わずにじっとしていることはできなかったが、背中に眠る少女を思うとクロエの言葉に従うしかなかった。

「分かった。クロエ空士長。頼むよ」

エリオンの言葉にクロエは頷き、ベルクトを空へと向け、シグナムとヘリの間にその射線を固定した。

「シグナム隊長、ヴァイス陸曹、そのまま私の射線に入らないでください」

クロエはデバイスのバッテリーをハーフレベルまでロードすると、そのままの姿勢で攻撃を開始する。

「デイバイン・バスター、ファイア。」

【ベルクト】の先端より放出される大規模な魔法流はそのまま砲撃として進路上の障害に襲いかかり、その範囲内にあるあらゆるモノをそのエネルギーによって吹き飛ばす。

敵集団に穴が開いた。

それを確認し、エリオンはデバイスをセットアップできない状態における最大速度でヘリに向かって飛行を開始する。

しかし、敵もまた真空中に向かって舞い込む空気のようにその穴を

ふさごとと飛来する。

アクティブ・ホーミング・オートロール・オープン

「魔法弾、能動追尾、迎撃開始」

クロエはそれに対して、自動追尾弾を放射しエリオンの進路を確保する。

敵の総数はそれほど多くはない。しかし、その一体一体がそれなりに高性能な制御装置を備えているらしく、訓練の時ほど正確に着弾はしない様子だった。

アクティブ・ホーミング

確かに、能動追尾弾は魔法弾そのものに追尾機能すべてを持たせた高性能弾頭ではあるが、人間の意識の介入がない分その軌道は読まれやすく、また弾速も低い。

セミ・アクティブ・ホーミング

クロエは歯を食いしばり、魔法弾の制御を半能動制御へとシフトさせ、再び迎撃を開始する。

エリオンはデバイスすらセツトアップできない状況にいらだちを隠せなかったが、現状を打破するためにはとにかく少しでも早くヘリにたどり着くことだととして、背中を守るクロエの技術を信じた。

しかし、クロエだけではその数进行处理しきれず、やがて彼女も自らに群がる敵の処理にかかりきりになってしまう。

「シグナム隊長！」

どうあっても背中少女をパージして戦闘を開始するわけにはいかず、エリオンはもう一人の助けを要請するが、

「すまない、こちら手一杯だ！」

シグナムも並み居るそれらに対抗する以外の手段を持ち合わせていなかった。

エリオンはデバイスを用いない非効率的な飛行で何とか敵をかくぐろうとするが、徐々に密度が高まっていく障害の前に、ついにはヘリにたどり着くことなく停止してしまう。

（何か方法があるはずだ）

自らの周囲を鳥かごのように囲い込み飛行するガジェットをにらみつつ、エリオンは対抗の策を思い浮かべるが何も出てこない。

せめてこの少女が眠りから覚め、自らヘリへと飛行できれば。

それを思い浮かべるエリオンは、背後から何かの機動音を耳にした。

ガジェットかと思い、視線を後ろへとやるがその音はあまりにも近すぎる。そして、自らの背中が徐々に熱を持つてくることに気がついた。

『初期起動正常終了完了。状況、^{マスター}入力者の危機。防衛プログラムロード開始』

ヒュインという音が、彼の耳朵をなでつける。そして、その声はエリオンの背負う少女の口からはき出されていることに彼はようやく気がついた。

『防衛プログラムロード完了。プログラムの各所に欠損が認められる。エラーコード12,15,24,289検出。現状に問題無しとして無視。起動開始』

そして、エリオンは己の背中が次第に軽くなっていくことを理解した。

そして、彼は振り向く、まるで氷のような表情で周囲のがジェットを見つめるその少女を。透き通るほどの白い肌とまるで背中を覆い尽くすほどにのばされた青い長髪が風もないこの空間において靡く様を。

「HMISLS-1092C-Rasioは、^{ラシオ}これより^{マスター}入力者の生命保全のため障害のすべてを排除します」

凜と透き通った声が戦場に響き渡る。そして、その瞬間その少女はエリオンの眼前より消滅した。

エリオンの周りで引き起こされる爆発。エリオンは「ラプター」をセフトアップし、その情報の収集を開始した。

「マスター、お下がりを。この空域は危険です」

黄金に輝く瞳を持つ少女は、エリオンの背後に飛来し彼を敵から守るように多数の光弾を発射した。

「君は？」

「私は、HMISLS-1092C-Rasio。Dr・エイドリ

アン・クフォードによって製作された自己学習型人工知能を搭載する人間型機械です。現在、入力者の守護を最優先とし、緊急防衛プログラムをロード中です」

R a s i oと名乗った少女は、そういつて再び高速機動に入り、飛来するガジェットのことごとくをその力によって破壊した。

「R a s i o、君が戦うことはない。一緒にヘリまで帰還する。付いてくるんだ」

エリオンはともかく任務を遂行することを主眼にしてR a s i oにそう命じた。

「了解しました。上空1200に飛行体を確認。帰投ヘリと断定し、マスターの進路を確保します」

R a s i oは素早く方向を転じ、その方角に群がる敵構造体を素早くロックすると有無を言わず攻撃を加え、エリオンの進路を確保した。

エリオンもそれに続き、自らのデバイスによって攻撃を続け、そして数分の時也有さずにヘリへと降りたった。

「ヴァイス陸曹は操縦室へ。シグナム隊長、クロエ空士長はすぐにヘリに帰投を。速やかな離脱を具申します」

エリオンはそう言うのと、傍らで外に向け射撃を続けるR a s i oの隣に立ち、デコイとチャフを織り交ぜた魔法弾を周囲にばらまいた。

エリオンの提供した攪乱によりガジェットは統制を失う。シグナムはそれを見て、全機離脱を決定した。

クロエとシグナムがヘリに戻り、エリオンは最後の仕上げとしてキハイル式カートリッジを全弾リロードしその銃口を敵集団へと向けた。

「Confusion Air」

その短い言葉と共に、エリオンは許されるすべての容量を持って攪乱弾を全弾射出させた。

チャフによる魔術波探索の攪乱、デコイによる追尾機能の不全化。

そのタイミングを持ってヴァイスは全力で空域を離脱させた。

「危機の回避を確認。H M I S L S - 1 0 9 2 C - R a s i o は自らの保全のため休止モードへと移行します」

危険が去ったことを確認した R a s i o はその言葉を最後に事切れるようにその場に崩れ去った。

「ふう……」

エリオンのため息と共に、加熱した銃身を冷却するべく【ラプタ―】は外装を開き勢いよく冷却ガスを噴射させる。

白く煙る蒸気が流れゆく大気にまわりつき、まるでそれは航空機の後にできる筋雲のように流れていく。

キハイル式カートリッジを使用したにもかかわらず、体内の魔力消費が激しいことにエリオンは気がつき、そのまま膝をつきヘリの壁面に体を預けた。

「ご苦労だった、エリオン。到着まで休め」

シグナムの言葉に頷き、エリオンはシートに腰を下ろすともう一度大きく息を吐き出し、そのまま薄れ行く意識に抵抗せず、微睡みのうちに身をゆたえた。

「何だったんですかね、あのガジェットども。それに、この子は一体何者なんでしょうか？」

機の操縦をデバイスに任せてきたのか、ヴァイスも姿を表し開きっぱなしのキャノピーを閉じ、その傍らに横たわる少女を見下ろした。

「分からん。ただ言えることは、私たちはひどく面倒なことに巻き込まれてしまったと言うことだ」

シグナムは、エリオンの対面に寝かされている少女を一瞥し、甲冑と共に【レヴァンティン】を解除した。

「あかん、遅刻や。急がんと」

時空管理局本局にたどり着いたはやては時計を見ながら目的地へと急いだ。本局でも有名な彼女は道行く傍ら様々な者から声をかけられ、はやてはそれにいちいち返事をしながら歩みだけは止めなかった。

ようやくたどり着いた本局の施設の一角。はやてがセーフハウスとして利用しているその部屋には既に来客が会ったらしく、はやては急いで部屋の暗証番号を入力し生体個人認証をすませその中へと立ち入った。

「お待たせやー、フェイトちゃん、ユーノ君。遅れてごめんな」

そのリビングに腰を下ろすフェイトは、

「私も今来たばかりだから」

といった優しく微笑んだ。

はやてはそんな彼女を見て、制服の上着をソファの脇に放り投げると、待ち合わせの相手のもう一人がいないことに気がついた。

「ユーノ君が来てないね。何か急用でもできたのかな」

ホワイトカラーのシャツにゆるめたネクタイとすっかりリラックスした様子ではやてはガラスのテーブルを挟んでフェイトと向き合った。

「うん、それがね、ユーノは……」

フェイトは少し表情を落とし、今朝ユーノが話したことをはやてに伝えた。

「そうか、ユーノ君がそんなこと言ったんか」

フェイトの話を一通り聞き終え、はやては途中から用意したにもかかわらず一度も口をつけていなかった紅茶を手に取り、冷たくなったそれをのどに流し込んだ。

「どうする？ はやて。私、ユーノに言われて自信がなくなっちゃった」

フェイトは話す終始うつむいてはやてに視線を合わそうとしなかった。

「うちは……あきらめとくない。なのはちゃんを傷つけるかもしれない。へんゆーのは怖いし、いやや。せやけど、うちは知りたい。それに……」

失踪した南雲の足取りを知るためにも、何よりも親友の人生を狂わせてしまった原因を知るためにも、はやては立ち止まるわけにはいかなかった。

「隠されてる事実がある。そこに犯罪がある。それを見過ごすわけには行かへん」

はやては手を握りしめた。

「私は」

フェイトはそれでも迷っていた。フェイトの脳裏には、ユーノが最後に言った言葉、『さよなら、フェイト』という言葉が染みついて離れなかった。

フェイトにとってあの言葉は、決別の言葉だったのではないかと思えた。彼の愛するなのはを傷つける者は誰であつても、たとえ親友であるフェイトであつても許しはしない。もしもフェイトがその道を選び続けるのなら、ユーノはフェイトの敵になる。

そういった覚悟の言葉だったのではないかと思えて仕方がなかった。

はやてはフェイトの答えを待った。その答えいかんでは、この先一緒にやっていけるかを決定しなければならない。そして、自分自身が歩もうとしている道に彼女を巻き込むことを彼女はまだ迷っていたのだ。

これから自分の進む道は黒の道。その先には一点の光も見えず、すべてが闇の中。ともすれば、それまで培ってきた自分自身をすべて捨て去る覚悟をしいるものでもある。

沈黙が包む部屋の中で、突然はやての通信機が音を立てた。

「おっと、ごめんなフェイトちゃん」

はやてはそういうと素早くモニターを立ち上げ、その先に映る自分の副部隊長、アグリゲット・シェイカーが申し訳なさそうな表情

を浮かべていた。

「部隊長、所用の所失礼いたします」

「ええよ。何かあったんやね？」

「はい、先ほど遺跡調査の部隊が現在帰投中なのですが、どうも調査中にガジェット編隊の襲撃を受けたとのことでした」

「ガジェットの？　どういうことや」

「詳しいことはまだです。それと、シグナム隊長達の持ち帰ったモノにいくつか奇妙な点がありまして。至急、対応していただければ」と

「分かった、すぐに戻るわ」

「お願いいたします」

アグリゲットはそういつて通信を終えた。

「なんだか、大変なことになってるね」

その通信を耳にしていたフェイトは、遺跡、ガジェットの言葉になにやら不穏なモノを感じ取った。

「そうみたいやな。ごめんな、フェイトちゃん。こっちから呼び出しとして」

帰投の準備をしながら、はやてはぺこりとフェイトに頭を下げた。

「いいよ、私も少し考えなくちゃいけないと思うから。もう少しだけ、ここにいてもいい？」

「ええよ。帰るときは戸締まりと周囲の警戒を忘れんといてえな」

はやてのセーフハウスであるこの場所を知る者は非常に少ない。

彼女が特別捜査官だった時代に、上司からの薦めで作られたものだが、それ以来彼女はここを大いに利用している。

フェイトも、こんなことが起こらなかったらこの場所の存在を知らなかったぐらいに、はやてはこの場所をひた隠しにした。自信の守護騎士達にさえも。

「それじゃ、またな。二、三日中にリインを使いに行るさかい」

つまり、それまでに答えを出しておけ。そういうことだとフェイトは理解すると、笑みを浮かべ彼女を見送った。

フェイトは一人になったりビングを見回し、そつとため息をついた。

「はやては本当にまっすぐだな。私は、だめだ。優柔不断」

そして彼女はまっすぐなはやてやなのはに比べ、その心根は非常に繊細にできている。そしてフェイトは思い出していた。親友が寂しそうな表情を浮かべ、『私には覚悟ができなかったんだよ』という言葉を。

覚悟とは何だったのか、なのはにしいられた覚悟、そしてなのはほどの強い人間でもできなかった覚悟とはどんなものだったのか。

「やっぱり、知りたいよ。なのは」

自分はやてやなのはとは違う。迷いつつ、道を見失いつつ、それでもゆっくりと進んでいきたい。フェイトはそう決心すると、すっかりとした足取りでソファから立ち上がり部屋を出る準備をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9446f/>

魔法少女リリカルなのはFF ~ Twilight Twins ~

2010年10月14日12時07分発行